


直交行列とユニタリ行列

ref: 長岡亮介 線形代数
入門講義 p275~276
ref: 行列と行列式の基礎 p204


 ユニタリ行列 複素正方行列 A が次を満たすとき、 A を **ユニタリ行列** という

$$A^* = A^{-1}$$

A が実正方行列のときは、

$$A \text{ がユニタリ行列} \iff {}^t A = A^{-1}$$

となり、このような A は **直交行列** と呼ばれる

 直交行列 実正方行列 A が次を満たすとき、 A を **直交行列** という

$${}^t A = A^{-1}$$

直交行列という名前の由来は、次のように考えられる

A を n 個の列ベクトルを横一列に並べたものとみなし、

$$A = (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n)$$

とおくと、 ${}^t A = A^{-1}$ 、すなわち ${}^t A A = E$ は、

$$\begin{pmatrix} {}^t \mathbf{a}_1 \\ {}^t \mathbf{a}_2 \\ \vdots \\ {}^t \mathbf{a}_n \end{pmatrix} (\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n) = \begin{pmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 \\ 0 & 1 & \cdots & 0 \\ \vdots & \vdots & \ddots & \vdots \\ 0 & 0 & \cdots & 1 \end{pmatrix}$$

と表される


これは、ベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ が、次の性質

$${}^t \mathbf{a}_i \mathbf{a}_j = (\mathbf{a}_i, \mathbf{a}_j) = \delta_{ij}$$

を満たすことを意味する

すなわち、直交行列 A の列ベクトル $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ は、互いに直交する単位ベクトルである

この事実は、複素行列に対しても成立する

 **todo** 複素正方行列 U を $U = (\mathbf{u}_1, \dots, \mathbf{u}_n)$ と列ベクトル分解するとき、

$$U \text{ がユニタリ行列} \iff (\mathbf{u}_i, \mathbf{u}_j) = \delta_{ij}$$


すなわち、ユニタリ行列の列ベクトルは、互いに直交する単位ベクトルである



ユニタリ変換

体 \mathbb{C} 上の計量空間において、内積を保つ線形変換を **ユニタリ変換** という

ref: 行列と行列式の基礎 p77~82

 **ユニタリ変換** 体 \mathbb{C} 上の計量空間 V における線形変換 f が **ユニタリ変換** であるとは、任意の $\mathbf{u}, \mathbf{v} \in V$ に対し、

ref: 図で整理！例題で納得！線形空間入門 p126~131


$$(f(\mathbf{u}), f(\mathbf{v})) = (\mathbf{u}, \mathbf{v})$$

が成り立つことである

体 \mathbb{R} 上のユニタリ変換は、**直交変換** と呼ばれる

ユニタリ変換とノルム

ユニタリ変換は、ベクトルの長さを変えない変換でもある

 ユニタリ変換とノルム保存性 計量空間 V における線形変換を f がユニタリ変換であることと、任意の $\boldsymbol{v} \in V$ に対し

$$\|f(\boldsymbol{v})\| = \|\boldsymbol{v}\|$$

が成り立つことは同値である

 証明


f がユニタリ変換 $\implies f$ はノルムを保つ

ユニタリ変換の定義より、

$$(f(\boldsymbol{v}), f(\boldsymbol{v})) = (\boldsymbol{v}, \boldsymbol{v}) = \|\boldsymbol{v}\|^2$$

ここで、 $\|f(\boldsymbol{v})\| = \sqrt{(f(\boldsymbol{v}), f(\boldsymbol{v}))}$ であるから、

$$\|f(\boldsymbol{v})\| = \|\boldsymbol{v}\|$$

が成り立つ 

f はノルムを保つ $\implies f$ はユニタリ変換

任意の $\boldsymbol{v} \in V$ に対し、

$$\|f(\boldsymbol{v})\| = \|\boldsymbol{v}\|$$

が成り立つというのが仮定である

そこで、 $\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b} \in V$ とすると、

$$\|\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}\| = \|f(\boldsymbol{a}) + f(\boldsymbol{b})\|$$

両辺を二乗して、

$$\|\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}\|^2 = \|f(\boldsymbol{a}) + f(\boldsymbol{b})\|^2$$

このとき、左辺は次のように展開できる

$$\begin{aligned}\|\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}\|^2 &= (\boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}, \boldsymbol{a} + \boldsymbol{b}) \\ &= (\boldsymbol{a}, \boldsymbol{a}) + 2(\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}) + (\boldsymbol{b}, \boldsymbol{b}) \\ &= \|\boldsymbol{a}\|^2 + 2(\boldsymbol{a}, \boldsymbol{b}) + \|\boldsymbol{b}\|^2\end{aligned}$$

右辺も同様に、

$$\begin{aligned}\|f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b})\|^2 \\ = \|f(\mathbf{a})\|^2 + 2(f(\mathbf{a}), f(\mathbf{b})) + \|f(\mathbf{b})\|^2\end{aligned}$$

さて、仮定より、 $\|f(\mathbf{a})\| = \|\mathbf{a}\|$ と $\|f(\mathbf{b})\| = \|\mathbf{b}\|$ が成り立つことから、

$$\|\mathbf{a} + \mathbf{b}\|^2 = \|f(\mathbf{a}) + f(\mathbf{b})\|^2$$

という等式の両辺を展開した結果、残る項は

$$2(\mathbf{a}, \mathbf{b}) = 2(f(\mathbf{a}), f(\mathbf{b}))$$

だけとなる


したがって、

$$(\mathbf{a}, \mathbf{b}) = (f(\mathbf{a}), f(\mathbf{b}))$$

が成り立つので、 f はユニタリ変換である ■

ユニタリ変換の表現行列

ユニタリ変換の表現行列は、**ユニタリ行列**である

 **todo** 計量空間上の線形変換 f がユニタリ変換であることと、 f の表現行列 A がユニタリ行列であることは同値である

 証明

f がユニタリ変換 $\implies A$ がユニタリ行列

A がユニタリ行列 $\implies f$ がユニタリ変換